

三度目のさようならにようやく顔を上げる
電車の扉は閉まった後だった

躊躇っている時間などなかったんだ
けれど振り切ることなんてできるはずがない

燈

月

雪

花

ガラス越しの君に届かないさようならを言うよ

雨上がりの夕空
白猫の死体
アスファルトの染み

トマトのスープはコンソメの味
いくらでも無関心に鈍感になれる
だからこそその日常

日

常

見たいドラマがあるのだと一人先に帰って行った
翌日彼女は来なかった
二日後に即死だと聞いた
別れが傍にあると知っていた
その癖それはありきたりな寂しさ以外の何物でも無い
と思ひ込んでいたんだ

薄いゴムの中で白濁の命が死んでいく
辿り着く場所は生臭くけれど温かいはずだった
無機質なゴミ箱の中
ただ息絶えるためだけに生まれた細胞レベルの子供
悲鳴が聞こえるはずはない

生

待つてと手を伸ばす
何もしていないよ
悪いこと何もしてないよ
いいことだっしてない
空気を吸ったことさえもない
本当に本当に何もしてないのに
生まれる前から
いらない
なんて言わないで

殺さないで
おかあさん

御注文は ○○ じゃあ同じものを

御注文は ○○ あたし××

一口頂戴 いいよ ……あ、これも美味しい

なるほど

選

択

買われた赤いテディベアを指差して泣く
いやいやよあれでなけりいや
赤いテディベアを差し出して言う
これだって同じでしょうこれで我慢しなさい
いやいやあれがいいの

これでなければいやなのだ
必死で訴えたあの心
(羨んだわけでも無い物ねだりでもなかった)
(それがよかったんだ)

乞

好きになつてください
私だけを選んでください
特別なのだと思ひ知らせてください
たくさんたくさん願ったけれど本当は
一度でいいから
何の気遅れも無く君の隣に立つてみたかっただけ

い

綺羅とした世界を愛せているだろうか
どろりと感情が糸を引く
沈澱する涙は感情を麻痺させ腐敗させる
できれば残酷な終わりが欲しい
泣けなくなってしまういつかが来ないように
期待すればするだけ潰れる心臓が悲鳴になって貴方に
暴力的に叩きつけられる前に

心

それでもそれは幸福の色をしていたように思う
愛していたのではないかと錯覚させてくれるのだ

たとえばの話を君は嫌う
もしもだったらなんて後ろ向きだと
けれど今より先のもしもは愛せるんじゃないだろうか
良くても悪くても
素敵でも非道くても
それらすべて
可能性と呼ぶんだらう？

先

の

事

逃げないで一分経ったらキスをするよ
一分だけでいいから
君の未来を僕で塗り潰させてよ

逢う

道路の向こう側にいる人をじっと見る
あの人によく似ている
本人かもしれない
じっと見続けていたらその人が道路のこちら側に目を
やった
ほんの少し首を傾げて
口が薄く開く
微笑んだあの人にそつと手を振った

約束も待ち合わせもしないで行こうか
運命なんて信じたりしないよ
それなのにまた出会えたら

その奇跡にはなんて名前を付けようか

振り向かないのは断ち切る為じゃないんだ
妄信であるかのように思ってる
ばいばいと言って手を振った
その一瞬を胸に抱くよ

けれど思いだせなくなった頃でもいいかもね
そうして僕らいくらだって始めて別れて
少しずつ繋いで積もって焼き付けてく
繰り返すことをただ信じてるよ

一生忘れないなんてできないから
忘れかけた頃に現れて
また見せてくれると嬉しい

ハロー グッバイ

ハ

口

一

(ねえ泣かないで
(四度目はさようならと言わない)
(ガラス越しの君にもきくと届くね)